

仮面ライダーエグゼイ
ド 大我の大冒険

ぽかんむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

意識を取り戻した大我が見たのは、バグスターとも違う奇妙な生き物だった。彼は元の世界に戻るため、謎の少女と行動を共にする

目次

後編 前編

--	--

24 1

前編

雲一つない青空の下に、草原が広がっている。ときどき吹く風が、草むらを揺らす。そこに白衣を着た男が、目を瞑って立っていた。彼の名は花家大我。職業は闇医者だ。

「どっだっはっは？」

まぶたを開く大我。周りはすべて始めての景色。彼の最後の記憶は、自宅のベッドで眠りについたこと。つまり一切の心当たりがなかった。

すると彼を取り囲むように、三匹のポケモンが現れた。彼の正面にはピカチュウ、右にはフシギバナ、左にカメックスが位置している。

「新種のバグスターか？」

襲いかかる三匹のポケモン達。大我は彼らの攻撃を避けつつ、ゲーマドライバーを腰に巻いた。

それからバンバンシューティングを、白衣のポケットから取り出そうとする。

しかしガシヤットは何一つ入っていないかった。三方向から迫ってくるポケモン。彼はそれらを防ぐ術を持たない。

カメックスには殴られ、ピカチュウから十万ボルトを受け、フシギバナに踏みつけられた。

そのとき少女の声が、彼の耳に届く。

「大我さん！ しっかりしてください！」

彼女は、右手にガシヤットを持っていた。そしてそれを、大我に投げつける。

「どうして奴が持っている？ いや、まずはこいつらをぶっ潰すのが先か」

バンバンシューティング！

ガシヤットのトリガーを引き、ゲームエリアを展開させる大我。

ドラム缶型のアイテムボックスが、多数現れる。

「第二戦術、変身」

ガシヤット！ ガツチャーン！ レベルアップ！ ババンバン！ バンバン！
イエー！ バンバンシューティング！

スナイプが起き上がると、フシギバナは横転させられる。彼は次にガシヤコンマグナムを召喚。それをピカチュウに向かって発砲。弾を脳天に受け、ピカチュウは倒れた。肩の二門の砲台から、大量の水溜「ハイドロポンプ」を繰り出すカメックス。彼はそれを、左に回転しながら避ける。カメックスにとつての死角に入り込んだスナイプ。

彼はマグナムを連射。まだ放水のやめないカメックスの、腹を傷つけていく。

フシギバナが起き上がる。するとそれは、花から二本の太いツルを伸ばす。スナイプの足にそれが巻き付けられる。彼は宙吊りにされてしまった。

「これで勝ったつもりか？」

彼はドライバーからガシヤットを抜く。次にそれを得物のホルダーに挿す。

ガシヤット！ キメワザ！ バンバン！ クリテイカルフィニッシュ！

放たれた光弾は、フシギバナを吹き飛ばす。ツルの力が抜けたことで、自由を取り戻すスナイプ。

迫ってきたカメックスが、右手を握ってパンチ。彼はマントをはためかせつつ、左の方向に身を翻した。

それからガシヤットを、右腰のホルダーに挿す。

バンバン！ クリテイカルストライク！

スナイプのライダーキック。受けたカメックスは爆発した。

「ミッションコンプリート……」

ゲットオン ガッシュューン

ドライバーのレバーが閉じられ、ガシヤットが抜かれる。変身を解いた大我。すると彼のもとへ、先程の少女がやって来る。

「流石ですね。私に力を貸してください！」

「断る、俺には他にやるべきことがある。早くここから出せ！」

「あなたを連れてきたのは私です。つまりあなたをここから出せるのも私だけです」

「てめえに協力しないと元の世界に帰れねえってことか」

「はい！ 一緒に頑張りましょうね！」

「てめえは何者だ？」

「私はリーリエ。よろしくお願いいたします」

この世界で起こっていることを、話し始めるリーリエ。彼女によると、元々この世界では、ポケモンと呼ばれる生き物と人間が平和に暮らしていたらしい。しかし別世界からの来訪者の出現によって事態は一転。

リーリエ以外のすべての生物は、来訪者によって洗脳されてしまう。

そこで彼女は敵を倒すため、別世界から味方を持ってくることを計画。そして送り込まれたのが、仮面ライダー・スナイプ・花家大我だった。

「奴等の居場所を教えろ。さっさとぶっ潰す」

「ダメです。敵を倒すにはすべてのガシヤットを集めなければなりません」

「なぜだ？」

「敵は皆、特定のガシヤットでないと倒せないのです。逆に言えば特定のガシヤットさえ手に入れば、簡単に倒せます」

「バンバンシューティングはお前が見つけたのか？」

「はい……… なんとか奪い取りました」

「どこにガシヤットがあるんだ？」

「これにすべてのついています」

そういうと、彼女は鞆から地図を取り出した。ガシヤットの名前が、手書きで書き込まれている。

彼が入手しなければならないのは

マイティアクションX

タドルクエスト

爆走バイク

激突ロボッツ

ドレミフアビート

ジェットコンバット

ギリギリチャンバラ

シヤカリキスポーツ

ドラゴナイトハンターZ

の合計九本だ。

「まずはここだな」

ト。大我がある場所を指差す。そこにあるとされるのはジェットコンバットのガシヤット。

その地点は、現在地からもっとも離れている。そのため、リーリエは他のガシヤットから狙うように提案。けれども大我に、意見を変える気はなかった。

今ここに、彼らの冒険が始まる。

「この先か……」

長い長い道程を、やつとの思いで踏破した二人。彼らの前には、そびえ立つ大きな山が。

リーリエの体力はもう限界。見かねた大我は、リーリエを背中に担ぐ。そして少しずつ登り始めた。

「絶対に離すなよ」

「はいー！」

敵のアジトはこの世界の中央に位置している。かつては宮殿であったが、今では来訪者達に支配されている。

そこにやって来たアロハシャツ姿の男。門の警備に当たっていた者が、彼の対応をす

「この世界に仮面ライダーが現れたぜ」

「誰だお前は？」

「自分九条貴利矢。あんたらに危機を伝えるためにやって来た」

「何が目的なのだ？」

「侵入者を倒す代わりに、ライダーガシャットをいくつか渡しな。具体的には……そうだな、爆走バイクとギリギリチャンバラとドラゴナイトハンターZで頼むわ！」

「わかった、管理者達にその事を伝えておく。地図を渡すから受け取ってこい」

「りょーかい、じゃあな」

大我はその頃、ゴツゴツした岩肌をよじ登っていた。手をかける位置を一回間違えるだけで、彼らは真つ逆さまに落ちてしまうだろう。少しのミスが命取りとなるのは山登りも治療も同じだ。

しかしそんな苦行もあと少し。気が付くと彼は、頂上まで手をのばしていた。最後の力を振り絞り、体を取り出す大我。

「着いたぞ…… はあはあ……」

「お疲れさまです、大我さん」

「アイツが…… ジェットコンバットの管理者か？」

「はい！」

山の頂上にいたのはボーマンダ。そしてその奥にあるのはガラス製のケース。中にはオレンジ色のライダーガシヤットが見られる。

間違いない。あれは確かにジェットコンバットだ。

「第二戦術 変身」

ガシヤット！ ガツチャーン！ レベルアップ！ バンバンシューティング！

スナイプはガシヤコンマグナムを召喚。Bボタンを三回押して、マシンガンのように連射。ボーマンダがそれを、飛行して避ける。

ズッキューン!

彼はマグナムのAボタンをタッチ。すると砲身が展開され、ライフルモードに変形された。サイトを覗きつつ、狙いを定めようとするスナイプ。

するとボーマンダは動きを止め、雄叫びを挙げた。彼は敵の行動の意図が読めずに不審がる。

一瞬後、青空から大量の隕石が降り注ぐ。

「大我さんー!」

屈指の威力を誇るドラゴンタイプの技”流星群”

それは辺りを瞬く間に、焦土と化させる。土煙が舞い、リーリエの視界が閉ざされる。地上に降り立つボーマンダ。その際、翼のはためきによって砂塵が払われる。地面には大小様々な穴が、無数に空いていた。スナイプの姿はどこにもいない。

「嘘………そんな………」

ポーマンダが、次なる獲物を決める。ポケモンは彼女に、牙を向けて威嚇。彼女は恐怖から、足をガクガクと震えさせられた。

「まだ終わっちゃいねえよ」

どこからか、大我の声が聞こえる。彼がどこにいるのか、リーリエには知るよしもない。一方でポーマンダは、声の主が何処にいるのかを瞬時に悟った。

しかしもう手遅れ。既にポーマンダは、彼の射程圏内にしつかりと収まっていたからだ。

キメワザ！ バンバン！ クリティカルファイニッシュ！

地中から噴き上げた怒濤の光線。ポーマンダは打ち上げられた後に爆発。多くの肉片が、一帯に散らばった。

「流星群によって作られた穴を利用して、地中に潜んでいたのですね。そしてポーマンダの真下から、必殺技を撃ち込んだと」

「ああ、何はともあれ、これで一つ目のガシヤットは俺のものだ」

二人が奥へ進む。彼はそこにあったガラス製のケースを、マグナムで破壊。その中に入っていたジェットコンバットを、見事獲得した。

ゲームクリア！

「早速使うか。第三戦術」

ガシヤット！ ガツチャーン！ レベルアップ！ ババンバン！ バンババン！
イエーイ！ バンバンシューティング！ アガツチャ！ ジェット！ジェット！インザ
スカイ！ ジェット！ジェット！ジェット！ ジェットコンバット！

「これでこのあとは目的地まで、ひとつ飛びで駆けつけることが出来る。戦力アップにも繋がったしな」

「流石です！ 大我さん」

「次はドラゴナイトハンターZが眠っているとされる洞窟に向かう。しっかりと掴まっ

ておけ」

「はいー！」

圧倒的な機動力を得たスナイプ。これにより、どこへでも短時間で行けるようになった。

彼らがひとつ飛びで、洞窟の入り口まで辿り着く。

「ここから先は歩きだな」

「待て」

少年が後ろから、二人を呼び止める。彼らが振り向くと、彼はゲーマドライバーとライダーガシヤットを取り出した。

「兄様……！」

少年の名はグラジオ。リーリエの兄に当たる人物だ。戦いの果てに出来たものなのか、多少の傷が見受けられる。彼も来訪者による洗脳を受けているようだ。

ところで彼の持っていたガシヤットは、なんとガシヤットギアデュアルβ。

「変身！」

グラジオはダイヤルを回して、タドルファンタジーを選択。それをゲームドライバーに差し込む。

ガシヤット！ ガッチャーン！ デュアルアップ！ タドルメグル RPG タドルファンタジー

一度ブレイブクエストゲーマーになるグラジオ。そこにファンタジーゲーマが飛来し、アーマーとして装着される。

「兄様が変身!?!」

「レベル50だと……」

スナイプのレベルは現在3。一方、ブレイブファンタジーゲーマーのレベルは50。

正攻法で挑めば、どちらが勝つかは明白だ。

「実戦は初めてとはいえ、俺はこれまで厳しい訓練を積んできた。お前なんかには負けない」

実戦は初めて。スナイプはこの言葉に、一筋の光を見いだす。経験の差というのはなかなかバカに出来るものではないからだ。

それにレベル差があっても勝てるということは、永夢や飛彩が過去に実証してきたこと。

キメワザ！ ジェット！ クリティカルストライク！

いきなり必殺技を放つスナイプ。弾丸やミサイルが、四方八方から撃ち出される。

「そんな攻撃、とても効かん」

「狙いはてめえじゃない」

バンバンシューティングは起動させると、ドラム缶のようなものがゲームエリア内に配置される。

中に入っているのはエナジーアイテム。自分が取れば、戦いを有利に進めることが出来る。しかし中身を知るには、実際に壊してみるしかない。

今回のスナイプの攻撃の意図はドラム缶の破壊。これにより、中に仕舞われていたエナジーアイテムの種類を、瞬時に見切られるようになる。

コウソクカ！

彼は使用したアイテムの効果で機動力を強化。洞窟とはいえそこはだだっ広い場所。従って彼は思う存分、飛行というアドバンテージが使える。

ブレイブの周りを素早く移動しつつ、バルカン砲の攻撃を浴びせるスナイプ。

「……これでいくか」

ブレイブを倒すための作戦を、思い付いたスナイプ。彼が、辺りをよく見回す。すると彼の探していたアイテムが、すぐに目についた。

「ならば俺もアイテムを使わせてもらおう」

コウテツカ！

エナジーアイテム・鋼鉄化の効果は身体を頑丈にすること。防御力が上がり、応用すれば攻撃にも利用できる。

彼は漆黒のマントを右腕に巻き付ける。するとそれがドリルのように回転。彼はそれを、スナイプに伸ばした。

硬化したマントが、スナイプの胸をえぐる。そして彼は地に落とされる。

「とどめだ」

ドライバーのレバーを一度閉め、再び開けるブレイブ。

キメワザ！ タドル！ クリテイカルスラッシュユ！

召喚されたガシヤコンソード。その刀身に、紫色のエネルギーが蓄積。彼が剣を二回払う。X字状と化した斬撃が、スナイプに襲いかかる。

「それを待つてたぜ」

ハンシヤ！

アイテムをバルカン砲で撃つことで、その効果をゲットしたスナイプ。そのエナジーアイテムは、彼が事前に置場所をマークしていた物だった。

跳ね返された攻撃が、一直線にブレイブを襲う。意外な攻撃に対応できないブレイブ。

攻撃をまともに受け、彼の変身が解かれた。

「ガシヤットギアデュアルβは俺がいただく」

グラジオのドライバーから、ガシヤットを奪い取ったスナイプ。

これは敵アジトで繰り広げられる戦闘では役に立たない。だが管理者達を倒すには、

これ以上無いぐらいの強力なガシヤットだ。彼とリーリエは先に進む。

「実の兄が死んだというのに、随分と冷静だな」

「どういうことですか？」

「悲しいとかないのか？ まあ言われたところで、俺からしたらどうでもいいことだけだな」

「彼は洗脳されていたのですよ。所詮兄様の姿を模しているに過ぎません」

やがて二人は、最奥地まで辿り着いた。しかしそこにポケモンの姿はない。代わりにいたのは、スナイプにとって見覚えのある人物。

「レーザー…… てめえは死んだはずじゃ……」

「久し振りだな、大我」

「ここで何をしている？」

「自分はガシヤットを集めているんでね。悪いことは言わない、早く帰れ」

「あいにくだが俺もガシヤットを集めている。持っているならよこせ」

「どうせ自分は一度死んだ身だ。いいから早く帰れ」

そう言うのと貴利矢は、アロハシャツのポケットに手を突っ込む。取り出されたのはガシヤットではなく、三つのモンスターボール。それらが投げられた。

「いけ、アギルダー、キリキザン、ガブリアス！」

ボールより繰り出された三頭のモンスター。それらが一斉に、スナイプに襲いかかってくる。

彼はバルカン砲をぶっ飛ばす。だがアギルダーとガシヤットにはかわされ、キリキザンには弾かれてしまった。

「だったらこれだ。第五拾戦術！」

彼はギアデュアルβのダイヤルを回し、バンバンシミュレーションを選択。それからそれを、ドライバーに差し込む。

ガシヤット！ ガッチャーン！ デュアルアップ！ ス克蘭ブルダ！ シュツゲ

キハツシン バンバンシミュレーション ハツシン!

戦艦を身に纏い、強化されたスナイプ。レベルは先程のグラジオと同じく50だ。

彼はまず、両手の大砲を発射して、キリキザンを吹き飛ばした。

ガブリアスが地中に潜る。彼が意識を地下に集中していると、やかましい音が鳴り響いた。それはアギルダーの技“虫のさざめき”

発生源を止めるため、左肩横の砲台を、アギルダーに発射するスナイプ。しかしその虫は“先取り”を発動。光弾は、撃った本人に直撃。

地中のガブリアスが、彼の両足首を掴む。身動きの取れなくなった彼に、キリキザンの“アイアンヘッド”が繰り出された。

最後に、ガブリアスが地上に勢いよく飛び出す。もちろんスナイプを掴んだまま。

彼は洞窟の一番上に叩きつけられた後、地面に投げ飛ばされた。

「早くここからログアウトしろ」

貴利矢がこう伝えるが、スナイプには届かない。しかしその原因はダメージではない。事態を打開するための策を思い付いたからだ。

勢いよく降下するガブリアス。必殺の一撃”ドラゴンダイブ”を繰り出そうとする。

後編

キメワザ！ バンバン！ クリテイカルファイア！

スナイプは両腕をくつつけ、戦艦のようにする。それから、ガブリアス目掛けて全砲門で一斉放火。

ガブリアスは打ち上げられ、終いには洞窟の天井を突き破った。その際に作られた破片が降り注ぐ。

「大我さん！ このままだと生き埋めになってしまいますよ！」
「逃げるぞで」

割れ目が広がり次々と、連鎖的に崩壊していく洞窟。スナイプはリーリエを脇に抱えると、全速力で逃げ出す。

その間、彼は貴利矢のことについてずっと考えていた。なぜここにいるのか、なぜガシャットを狙うのか、なぜポケモンを使役できるのか、などなど。

間一髪で逃げ切ることができた二人。リーリエが振り向くと、既に洞窟は塞がっていた。

「危なかったですね……」

その後大我は激突ロボッツ、ドレミファビート、シャカリキスポーツ、マイティアクシオンXを獲得した。

現在二人は、タドルクエストが眠っているとされる森に来ている。

次々と襲いかかってくる野生ポケモンの群れ。スナイプシミュレーションゲーマーは、それらをひたすら砲撃していく。

森を抜けるとそこには大きな滝が。そして最後の管理者であるラグラージが潜んでいた。

マッドショットを口から、マシンガンのように吐き出すラグラージ。スナイプはそれを正確に撃ち落としつつ、間合いを詰める。

ラグラージが、地面を拳で殴る。すると地震が発生。揺れにより、標準の合わなくな

るスナイプ。

その隙に放たれた“ハイドロポンプ”。彼は強烈な一撃を受けて転がされた。

「俺達は……遊びでやってんじゃねえんだよ！」

立ち上がるスナイプ。水流を纏ったラグラージが、彼に突進を仕掛ける。

「あれは滝登り！ 気を付けてください！」

リーリエの助言を無視し、微動打にしないスナイプ。彼はラグラージの攻撃を、両腕を体の前に突き出すことで受けきる。

それから、素早くドライバーのレバーを操作。

キメワザ！ バンバン！ クリティカルファイア！

零距离から放たれた高出力なビーム。まともに喰らったラグラージは、粉々に砕け散った。

彼らはタドルクエストを無事に回収。貴利矢が持っているものを除けば、大我達は全種類のガシヤットを集めきった。最後に向かうのは敵のアジトと化した宮殿。リーリエの実家だ。

宮殿に入るためには、門を潜る必要がある。そこには門番が一人、配置されている。大我とリーリエは今、その近くまで足を踏み入れていた。彼の作戦は、物陰から門番を狙撃して安全に浸入すること。

彼はガシヤコンマグナムを召喚。ライフルモードに変えて、標準器を覗きこむ。しかし見えたのは貴利矢。二人は予定を変更し、彼のもとに近づいた。

「ガシヤットを集めきったみたいだな。自分に渡しな」

「どうしてお前がここにいる？」

「自分、ここに所属してるんで。あんたと自分は敵通しなわけ」

「俺はもうお前には乗せられねえ。レーザー、この世界は……ゲームの世界。違うか

？」

大我がこう考えた根拠としては、何日間歩こうと空腹にならなかったことが第一に挙げられる。

他にはリーリエの兄に対する無頓着さ、地図があまりにも簡単すぎるなどがあ

る。「その通り。これは檀黎斗が万が一死んだとき、自分を甦らせるために作ったゲーム。ランダムで送り込まれたライダーが死んだ瞬間、代わりに奴がバグスターとして復活する仕組みなのさ」

「当然ゲームは不死身。マキシマムマイティXもない。つまりこのゲームは、絶対にクリア出来ない無理ゲーってこと」

「なんだと!？」

「自分に出来ることは、送られてくるライダーにこの事を伝えることだけ。だけど自分だって、いつシステムにバグとして処理されるかもわからない」

「お前が未来を託した男なら、こんなとき何て言うだろうな」

「永夢のことか? あいつなら絶対に諦めな…… そうか!」

「自分に乗れ、ウイニングランを決めるのは自分達だ」

宮殿に乗り込んだ三人。中には九体のバグスターが、敵を待ち受けていた。

大我はここで始めて来訪者Ⅱバグスターだということを理解。もちろん、同じ姿をしているだけだが。

「どういうことだ？ 九条貴利矢！ 裏切ったのか!？」

騙されたことに気付いていなかったバグスター達。彼らの非難を、貴利矢が一言で蹴する。

「あれ？ 乗せられちゃった？」

「おのれ！ かかれ！」

襲いかかってくる九体のバグスター達。もしこれが現実世界での戦いならば、大我達はあつという間に打ち負かされるだろう。

しかしここでは、そんなことは起こらない。

「ここは自分が引き受ける」

バクソウバイク！ ギリギリチャンバラ！

「3速 変身！」

ガシヤット！ ガツチャーン！ レベルアップ！ バクソウドクソウゲキソウボウソウ！ バクソウバイク！ アガツチャ！ ギリギリギリギリチャンバラ！

貴利矢が仮面ライダーレーザーザーチャンバラバイクゲームレベル3に変身。彼はギリギリチャンバラを、ガシヤコンスパローに差し込む。

キメワザ！ ギリギリ！ クリテイカルフィニッシュ！

大量の小さい矢が、カイデンに放たれる。敵は堪らず爆発。

キメワザ！ バクソウ！ クリテイカルストライク！

ライダーキックがモータスに決まる。これも爆破させる。

「そして、俺がゲンムをぶつ潰す」

その隙に大我が、奥に駆け出した。彼を襲おうとするバグスターを、身を呈して防ぎきるレーザー。

彼の活躍もあり、大我は無事に突破した。

「ノリに乗ってるぜ！」

レーザーが敵に取り囲まれる。彼はガシヤコンスパローを分割。鎌を両手に持つて戦う。

ガシヤット！ キメワザ！ ゲキトツ！ クリテイカルフィニッシュ！

ガットンの右パンチ。それを、上体を後ろに屈むことで、避けきる。

そして彼は、敵の腹部に重い一撃を与えた。

次に彼は、ガシャコンブレイカーとガシャコンソードを召喚。それに二本のガシャットを挿入。

キメワザ！ マイテイ！ タドル！ クリティカルフィニッシュ！

レーザーの二刀流での攻撃。ソルティとアランブラが斬り落とされた。

「少し気が引けるが、お前は姿が同じだけの別物。容赦はしねえぜ！」

キメワザ！ ドレミファ！ クリティカルフィニッシュ！

ガシャコンソードに、ドレミファビートを差し込むレーザー。遠心力をつけての一撃は、ポッピーピポポを倒すにはオーバーキル。

その後も彼はバーニア、チャージャーを立て続けに惨殺。その場にいたバグスターはすべて切除された。

「隠れてないで出てこいよ。ドラゴナイトハンターZの龍戦士さんよ！」

すると、とある扉が開いた。レーザーがその中に入る。そこにいたのはグラフィアイト。

「お前は俺への挑戦権を得た。どこからでもかかってこい」

「そうさせてもらうぜ、5速！」

ギリギリチャンバラとドラゴナイトハンターZを交換。初のフルドラゴンでの戦闘に挑む。

ガシャット！ ガツチャーン！ バクソウバイク！ アガツチャ！ ドドドラゴナ
ナナナイト！ ドラドラドラゴナイトハンター！ ゼット！

「培養」

グラフィアイトが、ガシヤコンバグヴァイザーのAボタンを押す。そしてそれを、右手のグリップパーツにはめ込む。

インフエクション！ レッツゲーム！ バッドゲーム！ デッドゲーム！ ワツ
チャネーム？ ザ・バグスター！

グラフィアイトが怪物に変わる。その体色は体の中心が黒、四肢の末端と首から上は赤い。ダークグラフィアイトとグレングラフィアイトの中間形態のような感じだ。

「超絶進化を遂げた今の俺の俺のレベルは50」

「自分には荷が重いかもしれないな。とはいえお前もバグスター。ゲームシステムからは逃れられないぜ？」

レベルで上回るグラフィアイトは、レーザーを一撃で倒せるだろう。一方でレーザーも、敵に対する特攻持ちだ。つまり先に攻撃が当たった方が勝利し得る戦い。

「ドドドドド紅蓮黒龍剣！」

キメワザ！ ドラゴナイト！ クリテイカルストライク！

グラフィアイトフアングを天高く掲げ、雷のようなオーラを現すダークグラフィアイト。レーザーは四肢のドラゴンクローに、橙色のエネルギーを纏う。

駆け出す両者。しかしグラフィアイトの方が素早い。彼の双刃が、圧倒的スピードで振り落とされた。

両腕を頭の上で交差させ、敵の攻撃を受け止めるレーザー。

「しまったー！」

「これでもくらえー！」

がら空きになるみぞおち。そこに、彼の貫くようにキックが炸裂した。

「レーザー…… 貴様も我が敵として記憶に留めておこう……」

グラフィアイトフアングが、音をたてて落下。彼は力尽き、仰向けに倒れた。そして爆

発。

「そんじや始めるか、大我がやられる前にな」

彼はリーリエに、マイティアクションXとタドルクエストを渡す。

そしてとあることを願った。

一方で大我はその頃、ラスボスまで辿り着いていた。彼がここまで来るとは思っていなかった檀黎斗。だが不測の事態というほどではないようだ。

「てめえを復活させるわけにはいかない。俺がぶつ潰す!」

「九条貴利矢から聞いていないのか? このゲームは攻略不可能だと。君を殺して私はコンティニューしてみせる」

バンバンシミュレーション! アユレデイ! フォーザバトルシップ!

「第五拾戦術」

デンジヤラスゾンビ！

「変身！」

ガシヤットをそれぞれのドライバーに差し込む両者。

ガシヤット！ バンバンシミュレーション！ ハッシン！

ガシヤット！ バグルアップ！ デンジャ！ デンジャ！ ジエノサイド！ デス

ザクライシス！ デンジヤラスゾンビ！ フー

変身が済むや否や、すべての砲門から攻撃を加えるスナイプ。

ゲムムはそれをかわさない。何故なら不死身だから。致死量のダメージを受けて倒れようとも、すぐに立ち上がってしまう。

「これでわかっただろ？ 唯一私を攻略できるリプログラミングもこの世界にはない。君に勝ち目はない」

「ないなら作ればいい！ あいにくそのための布石はすべて揃っている」
「ハツタリを……」

スナイプが再度発砲。それをものともせず近づくとゲナム。スナイプは彼の回し蹴りを、左砲台で受け止める。

ゲナムの素早い連打。徐々に防御が追い付かなくなるスナイプ。ゲナムの右ストレートパンチによって、吹き飛ばされたスナイプ。間合いが空いた隙に、すかさずゲナムがドライバーのボタンを押す。

クリティカルエンド

「俺は…… 倒れるわけにはいかねえんだよ！」

キメワザ！ バンバン！ クリティカルファイア！

黒いオーラを纏って宙へと浮かぶゲンム。彼は縦に高速回転しながら、スナイプに迫る。

迎撃体制を整えたスナイプが一齐放火。二つの攻撃が真つ向からぶつかった。

なんとか踏ん張るスナイプだが、威力はゲンムの方が上。このままではいつか押しきられてしまう。

だが運命は、とある音声によって、変えられた。

マキシマムマイティ！ クリテイカルフィニッシュ！

突如放たれた光線。それがゲンムに当たり、彼を吹き飛ばす。すると彼のライダーゲージが回復した。

「……間に合ったか」

「大丈夫か？ スナイプ！」

「皆さん！ どうですか？」

そう言いながら、駆け寄ってくるエグゼイド。後ろにはブレイブ、レーザー、リーリ

エの姿もある。

状況の理解が追いつかないゲナム。彼がスナイプに尋ねる。

「なぜだ？ マキシマムマイティXはこの世界に存在しないはず！」

「バンバンシューティングを集めたことで俺が呼び出されるのなら、マイティアクシオンXがあればエグゼイドを呼び出せるはず」

「加えてここにはレーザーもいる。あいつらがいればマキシマムマイティXを複製することが出来る」

「花家大我……！ だが私が一人でも君達を消滅させれば、コンティニュー出来ることに代わりはない！」

ゲナムがドライバーを操作。

クリティカルデッド！

増殖した大量のゾンビゲーマーが襲いかかる。エグゼイドが、スナイプの前に立つ。ゾンビは彼に触れた瞬間、一斉に爆発。しかしエグゼイドは無傷。

「レーザーから事情は全部聞いた！ お前の運命は、俺達が変わる！」

「永夢、久し振りに四人協力プレイで行かねえか？」

こう呼び掛けるレーザー。彼がドラゴナイトハンターZのガシャットを、ドライバーから取り出す。

するとそれが四つに分裂。エグゼイド、ブレイブ、スナイプのもとに送られる。

リーリエから渡されていたマイティアクションXを使い、エグゼイドはレベル2に変身。これで準備が整った。

「術式レベル5」

「第五戦術」

「5速！」

「大大大大」

「[[[変身！]]]」

ガシャット！ レベルアップ！ ドドドラゴナナナイト！ ドラドラドラゴナイ

トハンター！

レーザーからドラゴンフアングが分離。それがエグゼイドに装着される。

エグゼイド！

ドラゴンブレードとドラゴンガンが分裂し、二人のライダーに送られる。

ブレイブ！

スナイプ！

レーザー！

スナイプはジャンプして、左腕のドラゴンガンを放つ。ドラゴンフアングから炎を吹き出すエグゼイド。

ブレイブが近づきつつ、右腕のドラゴンブレードで斬り上げる。

同時攻撃は、ゲンムに反撃の隙を与えない。さらに畳み掛けるように、右足で回し蹴

るレーザー。

「不死身ではなくなつたとはいえ、レベル5ごときに……」
「それは俺達が最強の医療チームだからだ！」

エグゼイドが尻尾を伸ばして、ゲンムの胸を突く。動きを止められた彼に対し、スナイプの砲撃が炸裂。

横に斬り払うブレイブ。レーザーが両腕のドラゴンクローを大きく振り上げ、素早く下げて叩きつけた。

「フィニッシュは必殺技で決まりだ！」

ガシヤットをキメワザスロットホルダーに挿入する四人。

キメワザ！ ドラゴナイト！ クリテイカルストライク！

「私は……不滅だ！」

四人の必殺キックが、ゲムに決まる。彼は絶叫とともに爆発した。

「何も起こらない?」

疑問に思う永夢。彼は日頃ゲームに興じているが、クリア条件を満たしてもなんのギミックもないものなど、これまで見たことが無かったからだ。

「言っただろ? このゲームは攻略不可能。つまり檀黎斗を倒したあとのデータなんて存在しないのさ」

「僕たちはどうなるんですか?」

「お前達はこの世界からしてみれば異物だ。勝手に放り出され、精神は元の肉体に戻るはずだぜ」

「貴利矢さんは?」

「自分は謂わばバグ。巻き添えは避けられないかもな」

「そんな……せつかくまた会えたのに……」

「永夢、世界の……人類の運命は任せませ」

永夢達三人の身体が、末期のゲーム病患者のように透けていく。それを笑顔で見送る貴利矢。

永夢の叫び声は、もはや貴利矢に届かない。それだけ透明化しているということ。

貴利矢が最後に、右腕を前に突き出して銃を撃つように手を動かした。それは大我が変身するときの、パネル選択の仕方に酷似。

唯一真意を悟った大我。そして彼らは、ゲームフィールドをあとにした。

目を覚ます大我。時計は七時を指している。いつものベッドに戻ってきていた。

ゲーム世界では何日間か過ごしたが、現実ではわずか数時間でしかなかったようだ。

今彼の知らないところで、とある計画が着々と進んでいる。その名は仮面ライダークロニクル。バグスター達が人類を攻略し、人類を滅ぼすゲームだ。

さらに彼の宿敵の復活も、刻一刻と迫っていた……